

天童寺世代考 (七)

吉 田 道 興

東巖淨日 <一一三二一～一三〇八>

『寺志』と『続志』との記事に止泓道鑑の後に天童寺の住持になつたのは、「石門来（礼）」となつてゐるが、『扶桑五山記』には「東岩日（淨日）」の名を記している。石門であつたとしても資料不足の上から断定できないが、短期間であつたろう。実際のところ両者が天童寺に住した順序・前後は、今のところ分からぬ。

東巖の伝記は、『寺志』卷七に所載する「元学士文清袁桷」の撰述による「塔銘」が最も古く、その後の『灯史』の史料になつたのであろう。袁桷 <一一六六～一二三二七> は、慶元（寧波）出身の延祐進士である。しかし「塔銘」の撰

述年は不明である。ここでは、その「塔銘」を比較的分かりやすく整理した『補続高僧伝』を主に使用したい。

『補続高僧伝』卷十二所載の「淨日伝」に拠ると東巖は、嘉定十四年の誕生、南康（江西省）都昌の出身、俗姓は寥氏。幼少より食生活は葷（なまぐさい肉や野菜）を絶ち蔬菜・果物類を摂取することに務めていた、という。十五歳で親に懇願し、翌年（嘉熙元年）に廬山の香林寺で祝髪得度した。老人の様に背中に斑点があり長身で、丸い顔だけで傑出した輝きを備えていた。仰山（江西省宜春県）や石霜山（湖南省長沙府瀏陽県）に道を訪ねた後、浙江省に入り、癡絶道冲（一一六九～一二五〇）の門を叩き二夏を越えたが機縁契わず、徑山に登り無準師範（一一七八～一二

四九〉に相見すると無準は大いに受け入れ認めた、とある。

仰山・石霜山の修行期間や師僧の名は不明である。癡絶が天童寺と育王寺の両寺を兼領していたのが、嘉熙三年より淳祐四年（一二三九～一二四五）であるから、東巖の参訪は恐らくこの頃と思われる。無準に隨順していた期間も不明であるが、その没年までとすれば四、五年であろうか。その後、無準の法嗣である天童寺の西巖了慧（一一九八～一二六二）に謁見し、遂に密旨を得て法を嗣いでいる「臨濟宗虎丘派」。

西巖の天童寺入院は、淳祐十二年（一二五二）であり、宝祐五年（一二五七）まで止住している。東巖の西巖への参訪は、この前半であろう。なお宝祐四年、天童寺回禄の際、師の西巖を補佐したことも十分考えられる。東巖は、更にその後、甲刹の廬山開先華藏寺（江西省南康府星子県）の詩僧として有名な無文道燦（？～一二七一）に屈請され、その第一座になつてゐる。無文の開先寺止住期間は、宝祐三年（一二五五）以降の数年であり、その前後に饒州薦福寺に止住している。

景定年間（一二六〇～六四）、南宋末の忠臣賈似道（一

一二三～一二七五）の信任を得、江東（江蘇省・浙江省）の地を統帥（招討使）していた汪立信（生没年不詳）が東巖を慎み敬い、推輓して廬山の山麓にある円通寺（江西省南康府星子県）に住せしめ、繼いで東林寺（江西省德化県）を領有させている。円通寺と東林寺は共に甲刹である。東林寺の止住は、咸淳年間（一二六五～七四）の頃からであろうか。比較的長く住してゐたようである。円通寺及び東林寺は、出身地に近く多くの信者を獲得したであろう。

南宋が滅び、至元二十九年（一二九二）、七十一歳、育王寺（浙江省）に移遷し、間もなく（三年後か）十刹の雪竇山（浙江省寧波府奉化県）「資聖寺」に隠退している。雪竇山に隠退した理由は判然としない。果たしてこの時期か解らぬが、法嗣の平石如砥は乳峰（雪竇山の別名）で初相見している（『平石如砥禪師語録』題跋）。なお、『續阿育王山志』卷十六の「先覺攷」には、東巖を育王寺の「第五十五代」に列記している。

大徳三年（一二三〇〇）三月以前、（官府の主導による）僉議を経て推され、天童寺に入院している。東巖は八十歳の高齢である。健康を維持していたのであろう。なお『寺

志』卷三「先覺攷」には、「大德四年主天童時年八十一」とあり、一年の相違がある。しかし、同じ『寺志』卷一「建置攷」（上）の「至正二十年庚子有敕仍賜寶閣額曰朝元」の文中には、「大德三年禪師淨日益加聞於朝賜寶閣額朝元寶閣」とあり、前掲の文と矛盾する。『続志』卷上「先覺（攷）」には「庚子來主天童」とあり、「大德三年」説である。天

童寺の止住は、その後没年の至大元年（一二三〇八）まで続いたのであろうか。もしそうであれば七、八年間となる。大德四年、東巖と道友であつた龍源介清（一二三九—一三〇一）の語録が刊行され、その「跋」を撰している。

『寺志』卷二「建置攷」（上）には、「成宗大德五年辛丑賜朝元寶閣額因東巖禪師淨日增新允慶元路守臣之請也」とあり、大德五年（一二三〇一）東巖の代に「允慶元路守臣」（御史台の下、行御史台の役人か。地方官の役人か。）の招請により「朝元寶閣」の額を成宗（在位一二九四—一三〇六）より下賜されたことが知られる。東巖が門下や信者たちの援助を得て伽藍の整備に尽くした一端が現れている。

「廬山之民、奉貲以助尤侈」とある如く、特に先住地の廬山円通寺・東林寺の信者・住民たちの援助金が相当の額で

あつたことが記されている。東林寺には、東巖の師・西巖も一年程であるが住していた。

『増集続伝灯錄』卷五の伝記には、ある僧との問答1・上堂語3・臨終垂誠語1・遺偈1を所収している。従つて伝記というより語録抄の趣がある。次に「上堂語」の中、その二を示しておく。

上堂、釈迦掩室於摩竭、淨名杜口於毘耶白昼訛言妖言、不知鬨動幾家、直得楊岐三脚驢、走偏天涯海涯、夜來依舊宿蘆花上堂、萬法本閑、唯人自閑、喝一喝、苦瓠蓮根苦、甜瓜徹帶甜。

『補続高僧伝』には、東巖の性向について「師之行、峻潔以完、語溫氣和、衆益得以親、納其徒俾明徹復性、不侈於言、解其蔓惑」とあるように巖が潔白・完全無欠、言葉は温かく気性が和やか、大衆の利益を親に対する如く重んじ、門人たちには徹底して本性に帰らせ、言葉におごらず、煩惱の惑の実態を理解させることに務めていたことが判る。

最晩年、示寂せんとする時、『補続高僧伝』によれば、授戒の弟子に次のような「韻語」を書き取らせ示した、と

いう。

天為蓋兮地為函、吾奚為乎塔與菴、灰吾骨兮山河、言

已矢兮勿鏹

その二日後、沐浴し端座して逝去。遷化後、歯根は壊れず残つた。遺体は師西巖の「清風」塢に収藏された。『寺志』には冒頭に述べたとおり学士袁桷が銘を記した、とある。『増集続伝灯録』には、臨終に垂誠して次のように云つた、と記す。「私の滅後、ただ通常の僧たちの葬例により三日後に荼毘に付すだけにし、一切の喪礼を排しなさい。前輩（先人）の遺囑を歴観すると、骸（むくろ）を松下に晒し、遺骨を衆塔に収藏し、また長江へ投じてはいる。死後、しばしば諸徒の為にこの白占（よいおしえ）を藉りて、常に山地に住すことにしてよう。塔を造り庵を建てるのは、温飽の計である。どうしてそれが師弟の道であろうか」と。遺偈は、前掲のものと多少相違する。

天為蓋兮地為函底用、重當塔與庵燬骨焚軀

東巖は、くれぐれも自分の意向に沿うように申し付け、重ねて慚愧して示寂した。ここに両書共、東巖の名利を排し孤高な人柄を表現しようとしていることが理解される。

示寂年は至大元年（一二〇八）。月日は『続阿育王山志』に「五月初九日忌」とある。俗寿八十八、僧臘七十一。

東巖の法嗣には、平石如砥・大愚・安の二人が知られるが、『寺志』には「大愚安等五人」とあり、文中に諱の一字と思われる「東・圓・慶」の三人を出している。その東は東巖と同郷で「朝元寶閣」の建立や「千如來像」・供具に用する資金を調達させ、圓は吏事城中官府の事がらを譜んじていたので任せ、慶は注意深く慎重で上下老少との間を取り持ち和らげる、といった役割分担をしていた。この三人の力が發揮できたのは、よく東巖の規訓（おしえ）に由縁していたとの旨を記している。東巖は、弟子に大変恵まれていたわけである。平石は後日、天童寺に止住する。

○東巖史料

(1) 『補続高僧伝』卷十二「續藏一三四、一一三c～d」「淨日
伝」

(2) 『続灯存稿』卷六「續藏一四五、五c」卷首目次に「天童
慧禪師法嗣東巖日禪師——不列章次」とあり、名のみ。

(3) 『増集続伝灯録』卷五「續藏一四二、四二七b～c」「天童

西巖惠禪師法嗣四明天童東巖淨日禪師」、本文に述べたとおり、語録抄で伝記の形式にあらず。東巖に「語録集」のあつた可能性もある。

(4) 『続灯正統』卷二三「続藏一四四一三八一-a-b」「天童慧禪師法嗣寧波府天童東巖淨日禪師」、前掲『補続高僧伝』の後半部を略しているが記事をほぼ踏襲

(5) 『五灯全書』卷五〇「続藏一四一、五八b」「西巖惠禪師法嗣寧波天童東巖淨日禪師」、前掲『続灯正統』に同じ。

(6) 『寺志』卷三「先覺攷」[一三三三]～[一三三五]に「補伝」として所載。他の伝記にない法嗣に関する記事もある。その法嗣

の中、興味深いことには吏事城中官府関係の事務に長けた人が含まれていたことであり、当時の寺院にはこうした役割の人が必要であったことを知り得る。また卷七「塔像攷」[五〇五～七]に「東巖日禪師塔」の記事があり、「元學士文清袁桷撰銘序」が所載する。東巖の第一史料とすべきもの。その「塔銘序」の後に中峰明本の「題師像贊」がある。東巖と中峰との師・雪巖と西巖とは無準の法嗣で法兄弟の間柄である。

(7) 『続志』卷上「先覺」[一一〇b]、天童寺入院と示寂の年代を記す。卷下「法要」「四a～b」には、前掲『増集続灯録』

所載の「上堂語」3と「問答語」1を所収する。卷下「志余」[六a]には、『龍源介清禪師語録』の「跋」を所収する。ちなみにその『龍源介清禪師語録』一巻は、「続藏」[一]～[六]～[二]士洵等編、大徳四年跋刊である。卷下「塔像」[四b]には、法嗣の平石如砥の「東巖和尚忌辰拈香」語「平石の『語録』(天童寺語録)よりの所収」が所載する。

(8) 『続阿育王山志』(明州阿育王山続志)卷十六「先覺攷」[四a]には、「第五十五代東巖日禪師、嗣西巖惠公五月初九日忌」と記す。

竺西妙坦 <一一四五～一二一五>

竺西の伝記は、郷里を同じくする延祐の進士・黃溍(翰林侍講学士・金華黃先生<一一七七～一二五八>)撰の『天童坦禪師塔銘』がある。これと比較的まとまった『増集続灯録』卷五に所載する竺西の伝記とに依拠して勘案し述べる事にしたい。

竺西は、俗姓金氏、務州(浙江省)浦江の出身である。母は蓮華が庭に産出するのを夢見て(竺西を)生んだと宣伝した。換算すると咸淳二年(一二六六)二十一歳、郷里

の慧香淨月（生没年不詳）により得度受具した。杭州・北山靈隱寺・覺報袁公（生没年不詳）を参訪したり、天竺山の晦巖照公（生没年不詳）に従い、天台の「三觀十乘（一心三觀）」の法を研究しようと努めていた。咸淳年間から景炎元年頃（一二六五～七六）、折りしも虛舟普度（一一九二～一二八〇）が杭州靈隱寺に住し禪法を唱道しているのに会い身を投じ師事した。ある日、虛舟の室中において問答し、教乘的思考をつかれ拳で打たれて省するところがあつた。虛舟は、すぐに竺西を侍香（侍者）にしている。この時点での虛舟の法を嗣いだのであらう「臨濟宗松源派」。至元十三年（一二七六）、北山靈隱寺に隠栖生活をしていったが、翌十四年に虛舟が徑山に招請された時、竺西を書記に任じてている。その後、西遊し甲刹の承天寺（江蘇省蘇州）の覺庵夢真（生没年不詳）に相見している。承天寺には、師の虛舟も住したことがある。覺庵は、松源下・大歎仲謙の法嗣であり、虛舟の師・無得覺通と大歎は虎丘派の法兄弟である。

次いで無錫（江蘇省）の保寧寺に止住し、慧山（所在地不明）に遷り、甲刹第一の華藏寺（江西省南康府）に移つ

て隠退生活をしていた。その後、師・虛舟ゆかりの承天寺に久しく処し、更に十刹の靈巖寺（江蘇省蘇州）に数カ月滞在し、また虎丘山の祖塔を礼拝し遯隱していた。そうして静寂の中で突然、大德二年（一二九八）、旨を被り華藏寺の住持となり十年間過ごした。その間、靈隱寺の住持を招請されたが就かなかつた。至大元年（一三〇八）には、東巖の示寂後の天童寺住持となつている。

『塔銘』には竺西に『五会語錄』があつたことを記すが、現存しない。その五会である保寧寺・慧山・靈巖寺・華藏寺・天童寺、いずれのものか不明であるが、次の「上堂語」がある。

上堂、靜處闊浩浩、闊處靜悄悄。謹白參玄人、莫向兩頭討。出門總是長安道。

修行者は、一邊に固執したり、二局に迷つてはならない。竺西にすれば、靜處であれ闊處であれ、いずれの場所でも全力を尽くすだけのことであり、それが大道に通ずると強調したわけである。同じく「上堂語」

上堂、霜露既降木葉盡脫、古者道、有寒暑兮促君寿、有鬼神兮妬君福。是什諸人還覺寒毛卓豎麼。忽若死灰

裏火發、燎却面門、便是參學事畢。喝一喝。

この他次の「示衆語」がある。

示衆、五日風十日雨、野老不知堯舜力、今日三明日四、
悠悠空度少年時。大衆、還知天童苦心處麼。昨夜三更
月到窗、杜鵑啼在深深樹。

天童寺に止住して、時に飢餓の年に当たつてあらかじめ
食料等の蓄えをしないでいても參學の徒は常に数百人を数
えた、という。

『続灯存稿』はじめ、『続指月録』・『続灯正統』・『五灯全
書』には、竺西に参訪したある僧との問答が所載する。

僧參師問、從何方來。曰金鶩。師曰金鶩山高多少。僧
曰不見頂。師呵斥之。一日陞座、拳世尊拈華公案。僧
言下有省。

これに似た問答が『寺志』卷五「雲蹤攷」の孤峰明徳（一
二九四）～（一三七二）の項に掲載されている。あるいはそれ
が元になつて成立したものとも考えられる。孤峰は多数の
參學の徒の一人であつたわけである。

竺西の人柄の一端を表す月江正印（生没年不詳）が撰す
る「題師像贊」がある。なお、月江は、竺西の法兄弟・虎

巖淨伏の法嗣であり、竺西の法従弟にあたる。

河目錦心繡腸汪汪、呑太湖之器量煌煌、粲太白之光芒
怒罵、時海涵春育慈悲處、烈日秋霜拳玄沙未徹語、如
真淨驗寂音、黃金百煉之色、拈洞山三頓棒、類慈明發
積翠、丹沙九転之香、横機莫莫有陣堂堂夫是之謂中峯
五世大樹之廬涼者也。

竺西は、延祐二年（一二三一五）五月五日、方丈において
示寂した。この時まで天童寺に止住していたとすれば、七
年間となる。

世寿七十一、僧臘五十。全身を奉じて中峯の麓（中峯菴）
に塔を建てた。法嗣に五人いるというが、次の四人が知ら
れる。華國子文（一二六九）～（一三五一）、孚中懷信（一二
八〇）～（一三五七）、舜田明牧（生没年不詳）、正宗庄（生
没年不詳）。孚中懷信は、後日、天童寺に住している。

○竺西史料

(1) 『天童坦禪師塔銘』（『金華黃先生文集』卷四）・『四部叢刊

初編』305冊）所收。撰者の黃潛は、務州義烏の人、延祐2
年の進士。字は晉卿、号は日損齋、諡は文献。伝は『元史』

181卷・『新元史』²⁰⁶卷に所載する。天童寺関係の第三者が、竺西と同郷の黄潛に撰述を依頼したのである。『塔銘』の元になつたのは、徑山陵公(虚谷希陵)〔一一四七~一二三二〕の書状であつたことも銘文に入つてゐる。ただその撰述年次は不明である。ちなみに『寺史』卷一「九四」には「太史文獻黃潛詩」が所載する。これはその『文集』卷五~47にあるもの。

- (2) 『釈氏稽古略続集』卷一「続藏一二三一百一二a」に「竺西禪師坦」の名を挙げてゐるが、史実的記述はない。
- (3) 『五灯会元続略』卷首「続藏一四二一四二三a」に「徑山度禪師法嗣、天童坦禪師不列章次」とあり、伝記はない。
- (4) 『繼灯錄』「続藏一四七一三五五a」も名のみ所載し伝記はない。
- (5) 『続灯存稿』卷六「続藏一四五~六八d~六九a」「明州天童竺西坦禪師」、ある僧との「問答語」¹と月江正印の「題師像贊」を所収する。
- (6) 『増集続伝灯錄』卷五「続藏一四二一四三c~d」「四明天童竺西妙坦禪師」。比較的整理された伝記である。「上堂語」²・「示衆語」¹があり、これは竺西の「語錄」から収集したものであろうが、その全体は現存しない。

(7) 『続指月錄』卷六「続藏一四三一四四〇b」「寧波天童竺西

坦禪師」、前掲『続灯存稿』所収「問答語」¹と同じ。

(8) 『続灯正統』卷二三「続藏一四四一三七八b」「寧波府天童竺西坦禪師」、前掲に同じ。問答の冒頭部分が『続灯存稿』とは多少異なる。

(9) 『五灯全書』卷五十「続藏一四一~六一b」「明州天童竺西坦禪師」、前掲に同じ。

(10) 『寺志』卷三「先覺攷」「三三六~七」「竺西坦禪師、補略」、この末尾には明初の文学家・宋文憲公(本名は宋濂、字は景濂、号は潛溪)〔一三一〇~八一〕の文「惟昔天童坦公以一度真之學、上承松源四葉之伝、黑白趨慕儼如毛之有麿甲之有龜也」がある。卷七「塔像攷」「五〇八」には、「竺西坦禪師塔」について『旧志』に中峯菴の後にあつたことを記し、前掲『続灯存稿』にある月江正印の「題詩像贊」を所収する。卷五「雲蹤攷」「三四九」に参考者として孤峰明徳、「三五六」に古鼎祖銘を掲載している。

(11) 『続志』卷下「法要」「四b~五a」、前掲『増集続伝灯錄』所載の「上堂語」²と「示衆語」¹を所収。

四十九代 雲外雲岫（一二四一—一三三四）

雲外の伝記は、『雲外雲岫禪師語錄』の末尾に徑山興聖万寿寺住持南石文琇（生没年不詳）撰「天童雲外禪師伝」が所載する。その文末に擢翰林待制の柳貫（字は道伝、号は烏蜀山人（一二七〇—一三四二））撰の『塔銘』があつたことを知るが現存しない。南石撰の伝記及び『語錄』を参考に述べていこう。

雲外は、淳祐二年（一二四二）の誕生、字が雲外（『語錄』では雲外は号）、諱を雲岫・別号を方嵒、俗姓李氏。出身は、明州の昌国（浙江省定海県）。背丈は低かつたが、精悍さにあふれていた、という。

十八歳の年、靈隱寺東谷妙光（一二五三没）の法嗣直翁一（徳）拳（生没年不詳）に剃髪・師事している。やがて曹洞宗旨を究明して法を嗣いでいる「曹洞宗宏智派」。法兄弟に東明慧日（一二七二—一三四〇）がいる。

その後、あまねく叢林の名宿を参叩した。初め慈谿（浙江省寧波府慈溪県）の石門寺に住し、象山（浙江省象山县）の智門寺、嘉禾（浙江省秀水県）の天寧寺を経て、周囲の

人々の推挽を得て、竺西妙坦の後席を継ぎ四十九代の天童寺の住持となつている。「四十九代」は、『寺志』卷三と『続志』卷一とも共通して記している。

『語錄』は、智門寺在住時代のものであるが、その当時、多くの道友との交流があつたことを知らせる。「偈頌」の中に天童寺関係者に対するものとして「謝天童和尚相訪」と「寄大（太）白古林首座」・「答太白宗藏主」が見える。

智門寺在住期間は不明であるが、恐らく「天童和尚」とは、東岩淨日か竺西妙坦のいすれかであり、その相互訪問があつたものであろう。「古林首座」や「宗藏主」とは、その頃の首座や藏主であろう。なお古林清茂（一二六一—一三二九）は、すでにその当時、平江府（江蘇省）天平白雲禅寺に住しているから別人と思われる。

『語錄』「偈頌」の中に見える道友には、梓嵒和尚、中竺雪屋珂和尚、東臯友山和尚、覺菴和尚、靈隱虛舟普度和尚、雪竇石門和尚、烏山東叟和尚、大報國斷岸和尚、棲真和尚、常樂岳山和尚、昌化治平和尚、法華東洲和尚などの名が

ある。師兄に鹿苑仲章・同源、智門寺内門人の役職者として清蔵主・芭書記・恩蔵主・立維那・觀藏主、政府関係の役人や俗人として陳太傅・晦菴先生・高県尹・象山万松検察諸弟季・門朋先生の名があり、何らかの接触があつたことを示している。

中でも虚舟普度（一一九九～一二八〇）に対しても後輩格であるが、会中三夏、常に室中で「不是心不是佛不是物」の語を挙しているのを聞き、否定的「偈」を製している。また道友の中、元叟行端（一二五五～一三四一）には、後日「遺書」を認めている。

雲外の天童寺の入院は、竺西が延祐二年（一二三一五）五月五日の遷化であるから、その後の間もない時であろう。

前住・竺西の静處・鬧處に由来する「上堂語」に同調したものであろうか。次の「上堂語」（伝記所載）がある。

上堂、鬧市紅塵裏、有鬧市紅塵裏仏法、深山巖崖中、有深山巖崖中仏法。山僧、昨日出城門、鬧市紅塵裏仏法、一時忘却了也。行到二十里松雲、便見深山巖崖中仏法。大衆且道、如何是深山巖崖中仏法良久曰、白雲淡泞出沒太虛之中、青蘿夤縁直上寒松之頂。

雲外は、説法や教化に優れ巧みな比喩や引用文を縦横に用いたといわれる。そのため国内ばかりか三韓や日本の修行者たちが慕つて参じたとされる。次の「上堂語」は首座・書記・藏主に対する感謝の語である。

上堂、以拂子打一圓相云、摩訶衍法離四句絕百非。又打一圓相云、礼用和為貴、先王之道斯為美。又打一圓相云、摩尼珠人不識如來藏裏、親收得諸人還見麼。所見不同互有得失、天童這裏母固母必。

『塔銘』の断片には、「師拈提勤正答辨朗、烈至於中竺、四衆雲委夏席不能容、谿谷流声山林動色、真若隰州古佛之為法重見于世」とあり、優れた弁舌を讚えている。

天童寺在住時に多くの参学者が訪問したことと思われるが、その一人に楚石梵琦（一一九六～一二七〇）がいる（『楚石和尚行狀』、『楚石梵琦禪師語錄』卷二十所収）。

雲外の平生の心がけは、おごり高ぶらず、むさぼり貯めず、私腹を肥やすず、布施の利益を得るとすぐに人に与え、後輩の修行者を見ると敬い、いよいよ謹み宗門の人材育成を期して尽力した。二時の粥飯には必ず鉢盂を掌に持ち堂に赴く、といった風で示寂時にはよけいな蓄えは何一つな

かつた。そこで門人たちは喜んで募金して葬儀の費用を出し合つた、という。清貧な禅者雲外の心意気を良く伝えるエピソードである。

至治年間（一二三二—一二三）、中峰に畠秀軒を構築している。

黄潛の詩と袁桷の賦が残つてゐる。相当大きな楼閣だったようである。

叙述は前後するが、泰定元年（一二三二四）八月二十二日、端然として遷化した。世寿八十三、僧臘六十五。天童山の東谷に「塔」が建てられ、「四十九代」住持の称が記された（『寺志』卷三）。法嗣には、大方 聘（生没年不詳）、獨木 昇（生没年不詳）、愚菴 省（生没年不詳）、無印大証（一二九七—一三六一）、東陵永璵（一三六五没）の五人が知られている。中でも無印（佛日円明慧辯禪師）と東陵（妙應光國慧海慈濟禪師）が有名である。東陵は来朝し、天龍寺・南禪寺・建長寺・円覺寺などに住し「東陵派」の祖となつてゐる。

なお法弟の東明慧日は、既に来朝していたが、法兄の雲外を悼む偈が『語録』の付録に所収されている。異国の方において計報を聞き哀悼の意を表したわけである。また雲

外の著書として『宝鏡三昧玄義』（続藏二一一六一一）が残されている。

○雲外史料

(1) 『雲外雲岫禪師語錄』一卷〔続藏二一一九一五〕は、大德四年（一二〇〇）六月三日、象山文学稼陳晟の序刊。士慘の編。「雲外和尚住智門禪寺語錄」と称するように象山の智門寺における語録。他の寺院の『語録』は、逸亡したのか、現存しない。上堂・小參語の他、拈古・頌古・仏事・祖贊・偈頌・序「南游集序」「東歸集序」・跋「跋備用清規」、「宗門嗣法論」「東明日和尚住白雲山宝慶禪寺諸山疏」等があり、その後に徑山の南石文琇撰の「天童雲外禪師伝」が所載する。附錄に「師贊東明日頂相」「東明錄序」「禪林頌古集跋」「雲外和尚再住天諸山疏」二編・「哭雲外老人」「書鋟雲外岫禪師語錄後」、更に延享三年（一七四六）慈麟玄趾の拝題・公音道鏞の識語がある。

(2) 『枳氏稽古略續集』卷一〔続藏二三三一百一二a〕に「附見一百二十三人」の中に「雲外法師岫」の名を挙げている。

(3) 『続伝灯錄』卷三五〔正藏五一七〇九a-b〕「直翁拳禪師法嗣、明州天童岫禪師」前掲南石撰の伝記の記事をほぼ踏

天童寺世代考 (七) (吉田)

襲。五人の法嗣の中、四人だけで東陵永興の名がない。

- (4) 『五灯会元統略』卷一「[統藏]一四二一四二七dへ八a」「明州天童雲外岫禪師」前掲に同じ。『語録』付録の所収する無印との問答がある。法嗣については触れていない。
- (5) 『繼灯錄』卷一「[統藏]一四七一三五八d」「明州天童雲外岫禪師」前掲『五灯会元統略』にほぼ同じ。
- (6) 『五灯嚴統』目録卷下「[統藏]一三九一三d」「直翁拳禪師 法嗣天童岫禪師、不列章次」とあり、名だけで伝記はない。
- (7) 『続灯存稿』卷十一「[統藏]一四五一一二七aへb」「明州天童雲外岫禪師」前掲南石撰の伝記の記事を元に多少その構成を変え略述したもの。
- (8) 『増集続伝灯錄』卷二「[統藏]一四二一三九一aへd」「四明天童雲外岫禪師」前掲南石撰の伝記の前後の記事を略したものの。
- (9) 『続指月錄』卷三「[統藏]一四三一四一七bへc」「慶元天童雲外岫禪師」前掲『五灯会元統略』の記事とほぼ同じ。
- (10) 『五灯全書』卷六一「[統藏]一四一一四七cへd」「明州天童雲外岫禪師」前掲『続指月錄』と字句は多少異なるが構成と記事の内容はほぼ同じ。
- (11) 『寺志』卷三「先覺攷」「三三七一四〇」「雲外岫禪師」。

前掲南石撰の伝記の記事を元にしているが、独自の構成をしている。中でも清容居士袁桷との太白山に関する「詩」の贈呈・答韻を所載するが、『語録』には見えないものである。末尾に「塔於東谷称四十九代住持」とある。また「質誤」に『旧志』に雲外を竺西の前に列していたり、法嗣を雪竇(無印)大証一人だけを上げているが、共に誤りとしている。卷五「雲蹤攷」「三五六」に無印大証との機縁問答が掲載されている。卷六「法要攷」「四五一へ三」には、南石撰の伝記に所載する「上堂語」2と『語録』付録の無印との問答、「付録」として元叟行端の「雲外和尚遺書至上堂」がある。卷七「塔像攷」「五〇八」「雲外岫禪師塔」には、「東谷妙光塔」の傍らにあることを記している。また中峰明本の「題師像贊」が所載する。卷十「附余分攷」「七一四」には、『語録』「跋」所収の「雲外禪師禪宗頌古聯珠通修後跋」がある。卷二「建置攷」「九三へ六」に畠秀軒の構築の記事があり、黃溍の「畠秀軒詩」と袁桷の「題畠上人畠秀軒賦」が掲載する。

(12) 『続志』卷上「先覺」「一一b」「雲外岫禪師」。孚中懷信の伝記の一文を出し、孚中が竺西と雲外に師事したことを記す。〔質実〕には別山祖智が四十代住持、雲外が四十九代住持の位置づけは間違いないとの趣旨を述べている。『塔銘』など

に刻まれた文字が、その決め手となつたのであろう。卷下「志余」〔六a～b〕には、これも『語録』に所載する「南游集序」と「宗門嗣法論」を所収する。卷下「塔像」「四b」に東明

慧日の「哭雲外老人偈」、卷下「表貽」「九b」に燕南憲幕薩天錫「請雲外岫禪師住天童諸山疏」、同じく「九b～十一a」に象山陳晟「雲外和尚語録序」、同じく「十a～十一a」に日本花菴道鏞（公音）「鎌雲外岫和尚智門語録縁起」を掲載している。ちなみに公音は、上記(1)の『智門雲外岫和尚語録』二巻を日本で上梓（延享三年～一七四六・十一月）したことでも知られる。

(13) 雲外に関する研究として佐藤秀孝氏の論文「元代曹洞禪僧列伝（上）——天童山の雲外雲岫について」（駒沢大学仏教学部論集）第23号、一九九二・一〇）があり、12項目にわたり詳細に述べられている。また同氏に「元代江南の曹洞宗について」（宗学研究）第36号、一九九四・三）があり、この中でも雲外について闡説している。

東雲仏海

東雲の伝記は、不明な点が多い。出身地・俗姓・嗣承関係なども分からぬ。諸灯史にも「伝記」は掲載されてい

ない。史料がないのは、天童寺で遷化せず、有力な法嗣が少なく、その嗣承が途中絶してしまったことに関係しているよう。

『続志』卷上「先覺（攷）」に雲外の遷化した泰定元年（一三二四）から平石如砥の天童寺に入院した（天暦二年～一三二九）の五年間が空席であつたとし、その間を埋めるように『寺志』卷三「先覺攷」には、雲外の下に東雲を列していると述べている。ただし、その五年間を満たして止住したかどうかは別である。今は、この説を踏襲し、『寺志』卷三に所載する伝記の記事を元に以下まとめてみよう。

まず東雲が天童寺に止住した証拠として挙げているものに千巖元長（一二八四～一三五七）の語録『千巖和尚語録』の跋末に「前住天童佛海老人書」と署名されていること、また愚菴智及（一三一一～七八）の語録『愚菴智及禪師語録』（明辯正宗広慧禪師語録・愚菴和尚語録）の卷十の自題にも「天童佛海禪師遺墨」の語があることから東雲が天童寺に止住していたのは確実とされている。遺墨の語がいつ所収されたかは不明である。

この史料からは、東雲が天童寺を隠退し、遷化した期間

をそれとなく示唆している。すなわち両語録ともその刊行は明代であるが、一般に語録は門人がその祖師の在生中から編集され、遷化直後に刊行されるものであるので、千巖の遷化した至正十七年（一三五七）前後頃は隠退して悠々自適していたであろうし、愚菴の遷化した洪武十一年（一三七八）にはすでにその数年前に遷化していたことを示す。

なお、『寺史』に前掲の如く千巖の『語録』末尾「題千巖和尚語録後」（跋）の第二番目に東雲自身が「至正七祀丁亥季春、前住天童佛海老人、時年八十」とあり、至正七年（一三四七）春、東雲は「年八十」であったこと、更に同じく愚菴の『語録』中、前掲の「遺墨」語の文面に「海時年八十有五」と記す箇所を挙げている。さすれば東雲は至正十二年までは生存していたことになろう。これから逆算すれば天童寺在住の五年間弱は五十七歳から六十二歳以前となる。また誕生は『寺史』にも記されているように逆算して咸淳四年（一二六八）であろう。

『寺史』には、東雲の道友に前記の千巖と愚菴の他に天隱圓至（生没年不詳）がいて天隱関係の史料から出身地や修行地が漠然としながらそれとなく知られる。その天隱の

言（『天隱文集』「筠溪牧潛集」中の「伝記」の語か）に道友として東雲と楚石梵琦（一二九六—一三七〇）を挙げ、天隱と東雲とは故郷が同じで共に故郷を離れ、天隱は鄧山（浙江省鄞県）に留まり、東雲は太白山に行き、三年後に再会して「定惠院」（地所不明。江蘇省焦山の定慧寺（甲刹）か）にて受業し、東雲がその「定惠院」の書記を務めていたことなどの情報である。天隱と東雲の具体的「本貫」は不明であるが、鄧山のさほど遠からぬ浙江省の地域内であろう。

嗣承関係にしても受業師・参考師・本師の名はいずれも不明である。道友の千巖は中峰明本の法嗣（臨済宗楊岐派中、破庵派）、愚菴は元叟行端の法嗣（臨済宗大慧派）、天隱は別号を筠溪・牧潛とも称し雪巖祖欽の法嗣（臨済宗楊岐派中、破庵派）、天隱との道友楚石は愚菴と同じ元叟行端の法嗣（臨済宗大慧派）である。道友関係から言えば、東雲も臨済宗系の人であることが濃厚である。

東雲は、よく「凍蠅細字」で旧詩を手書きするのが得意であつたようである。また士大夫と詩の応酬をしたり、学人と門人と接触すると詩を残す、といった具合であるが、

その詩の大部分は失われてしまつた、という。

天童寺における東雲の動静は、前掲のとおり、泰定元年（一二三二四）に入院し、天暦二年（一三二九）以前に退院したこと以外、史料がなくなんら知られない。天童寺在住期間は、五年以下であり、それが四年か三年か、二年か一年か、まったく分からぬ。退院先もどこの地か不明である。至正十二年（一三五二）、八十五歳の高齢となつた東雲も恐らくその後さほど遠からぬ時期に遷化したものと推測される。

○東雲史料

- (1) 『千巖和尚語録』（千巖禪師語録）二卷、嗣詔編。①明、万曆四年（一五七六）跋刊。明又続蔵七一一三。②清、康熙八年（一六六九）、嘉興府楞嚴寺刊。『禪宗全書』語録（十四）、所収。台湾・文殊文化有限公司印行。
- (2) 『愚菴智及禪師語録』（明辯正宗広慧禪師語録・愚菴和尚語録・以中智及語）十卷、觀通等編。明、崇禎二年（一六二九）刊、明続蔵六三一六一七・正統蔵二二二九二。『禪宗集成』20、所収。台湾・藝文印書館印行。

- (3) 『天隱文集』（筠溪牧潛集）一冊、明河訂。明、崇禎十二年（一六三九）刊、汲古閣、岸沢文庫藏。筆者未見
- (4) 『寺志』卷三「先覺攷」〔一四〇～三〕、上記(1)(2)(3)の史料を元に東雲の天童寺在住を証明しようとしている。卷五「雲蹤攷」〔三六五～七〕に楚石梵琦との道友と思われる證侍者・安禪人・政書記・福州諾禪人がいずれも天童寺へ往参する際に詩偈などを贈っている。これらの人々は楚石の語録『楚石梵琦禪師語録』卷十五・十六の「偈頌」に散見できる。ただし、安禪人は見当たらない。彼らは、一時期とはいえ天童寺に掛錫していたのである。

- (5) 『続志』卷上「先覺」〔一一b〕には雲外の後に東雲を位置付けている。

怪石 奇

怪石は、『寺志』卷三「先覺攷」には石帆惟衍と止泓道鑑との間に想定している。しかし、『続志』卷上「先覺」には東雲仏海と平石如砥との間に置き、その理由として『寺志』卷五「雲蹤攷」の無作文述（生没年不詳）の項「略伝」に無作が行脚の途中、天童寺で怪石奇公に相見し語り合つ

て契合入室、その後に平石如砥が（天童寺の）席を掌つたとする記事を引用している。この記事には、残念ながら年号や期間を示唆するものはないが、世代順を知る上で大いに参考になる。なお無作は、怪石の法嗣である可能性がある。

要するに『続志』の世代順の説は、東雲仏海—怪石奇—平石如砥である。本論はこの説を踏襲する。東雲は、雲外の遷化した泰定元年（一三二四）直後に入院したと思われるがいつ退院したかは分からぬ。少なくとも平石如砥が入院する天暦二年（一三二九）以前に怪石奇が入院と退院が行われた訳である。

怪石については、俗姓・出身地・受業年・受業師・参学師・生没年などすべて不明である。徑山の雲峰妙高（一二九三）の法嗣であり、その雲峰の法兄弟にかつて天童寺に住した止泓道鑑がいる。雲峰と止泓とは、偃溪広聞（一一八九—一二六三）の法嗣である「臨濟宗大慧派」。

怪石は、泰定及び天暦年間（一三二四—一九）の後半期に天童寺へ進住したが、それ以前は『寺志』卷三「先覺攷」によると「初主大慈、後遷天童」とあるように「大慈」に

住していたことが知られる。その「大慈」とは恐らく笑翁妙堪（一一七七—一二四八）が丞相史弥遠（一一六四—一二三三）の外護によつて嘉定十三年（一二三〇）に開かれた大慈教忠報国寺であろう。甲刹の一つで寧波の東六十里（約三十キロ）にある。当初は、功德寺と称していた（『宝慶四明志』卷十三「教忠報国寺大慈山史丞相府功德寺」）。

灯史類には、以下三種の「普説」が所載する。ただし、これらは天童寺の動向も不明であり、必ずしも天童寺のものであるかどうかは判らない。

普説其略曰、參禪本無難易、只要具大信根有決烈志、萬機休罷千聖不攜、坐斷諸縁不存一法、如太虛空了無朕迹、如須弥盧屹然不動、無上真乘方可希冀。
又曰、此事如饑渴相似説飲説食、豈能救療、直須自飲水自喫飯、方有実効歟。

又曰、因拳從上先德痛切為人語要、開示倘能向者裏、虛却心不即法相不離法相、一聞頓悟便是涅槃會上、広額屠兒放下屠刀、立地成仏底時節是即是、不得恁麼會言多去道転遠、且截斷葛藤、喝一喝下座

これらの「普説」を見る限り怪石は、坐禪をする際、勇

猛心をもつて望み、不動の姿勢のままに修し、「涅槃」「成仏」を願うことを強調していることが知られる。「公案禪」の特徴がよく表れているといえよう。なかなか精悍な感じで機鋒鋭い物言いをする人柄であり学人たちは緊張気味で聞いたであろう。

怪石の晩年も不明である。天童寺の在住期間も前述のとおり、前住の東雲と合わせて五年であり、わずかの時期である。怪石も東雲と同様、天童寺で遷化したのではないと思われる。『寺志』巻「塔像攷」には、怪石の項はない。転住地（隠退先）・法嗣（無作文述がその一人か）・示寂年なども不明である。

怪石が隠退したと思われる天暦二年（一三三一九）（月日不明）、「朝元閣」が燬失している。はつきりしないが、あるいはこの責任をとつて隠退した可能性もある。

○怪石史料

- (1) 『続灯存稿』卷五〔続藏一四五—五九d—六〇a〕「明州天童怪石奇禪師」、「普説」の三種が掲載し、以下の「灯史」の基本史料となつていてる。

天童寺世代考(七)(吉田)

(2) 『増集続伝灯録』卷四〔続藏一四二—一四一五c〕「四明天童

(ママ) 怪石奇禪師

同右

(3) 『続指月録』卷五〔続藏一四三—四三三d〕「明州天童怪石奇禪師」、(1)の「普説」中、前二種を所収しているが、字句にいくつか相違がある。

(4) 『続灯正統』卷十四〔続藏一四四—三三三a〕「寧波府天童

怪石奇禪師」、(1)の「普説」三種を所収するが、順序が2・3・1となつていて、また字句もいくつか相違する。

(5) 『五灯全書』卷五五〔続藏一四一一〇〇d〕「明州天童怪石奇禪師」、(1)に同じ。多少字句が相違する。

(6) 『寺志』巻三「先覺攷」〔二二三〕、「師嗣法於雲峰高禪師初

主大慈後遷天童」とある。卷五「雲蹤攷」〔三五二〕「無作述禪師」の略伝。無作は慈溪（浙江省鄞県の西北）の人、元叟行端（一二五五—一三四一）と東嶼德海（一二五六—一三三七）に師事したが、機縁かなわず天童寺において怪石と相見

し契合、その後に平石が天童寺を繼席し、無作が「藏鑰」の職を掌つていてるうちに声誉が挙がり、そのうち「宣政院」の推挙で保福・護聖（福建省泉州龍溪県の保福か・浙江省寧波鄞県の大梅山護聖寺か）に移遷したとある。また「覺智圓明」の賜号を受けている。卷六「法要攷」〔四四〇—一〕には、

前掲(1)の「普説」三種が収載している。

(7) 『続志』卷上「先覺」〔一一b~一二a〕、『寺志』卷五「雲

蹤攷」「無作述禪師」の略伝中の字句（怪石と平石との天童

寺の席次）を引用している。

(8) 『淮安路開元寺開山怪石和尚塔銘』（『淮陰金石僅存錄』

「石刻史料新編」第二輯・為地方類、所収）。この塔銘は淮

安路（江蘇省平江府）の開元寺（中興）開山怪石のものであるが、部分的に肝心な箇所が摩滅していることもあり、同一人物かどうかは確かめられない。この塔銘は至元二十二年（一二八五）の立碑である。文中に怪石がかつて「無門聞禪師」（無門慧開（一一八二~一二六〇）か）の道行を慕つたことを記している。

平石如砥

平石の俗姓・出身地・受業年・受業師など不明であるが、語録『平石和尚語録』が伝えられ、昇住地や説示など比較的その後の動向が知られる。平石の法系は、無準師範—西巖了慧—東巖淨日—平石と連なる臨済宗虎丘派に属する。平石は、東巖の乳峰（雪竇山）在住時代に相見し師事して

法を嗣いでいる。『寺志』卷七「塔像攷」に東巖の「塔銘」が存し、撰者の袁桷にその撰述を申請したのが平石であった。

『語録』は、「慶元路保聖禪寺語録」「定水禪寺語録」「天童禪寺語録」の三会語録である。まずこれらの概観をしよう。

慶元路（浙江省慶元県）保聖寺の縁起、平石が昇住した由来は不明である。平石の「初住」地であり、大德三年（一二九九）三月十五日に入寺している。その時、師承香を焚き「見住太白名山天童景德禪寺東巖大和尚」すなわち本師東巖に拈香している。次の定水寺移遷まで在住していたとすれば、十四年間となる。この間、東巖は、至大元年（一三〇八）遷化している。平石は、皇慶二年（一三一三）四月八日、「退院上堂」をしている。

定水寺も所在地やその由来は不明。定水寺の入寺は、皇慶二年四月十二日である。同様に次の天童寺移遷まで在住していたとすれば十六年間となる。この「語録」中で注目されるのは、在家の劉氏の亡き妻の供養を示す「為雲山劉氏孺人対靈小參」が含まれていることである。当時の在

家法要の一端を示すものと思われる。

天童寺の入寺は、天暦二年（一二三二九）十二月一日である。「入寺式」の際、師承香で「前住当山先師東岩圓應大和尚」に拈香しているのは当然としても、賜号ないし墓塔名と思われる東巖の「圓應」という称は、順帝の治世であるがいつ与えられたのであろうか。

天童寺在住は、次の「退院上堂」語の文中から十三年間であることが解り、単純計算すると至正二年（一二三四二）までである。

退院上堂、老向山中償宿債、拖犁拽耙十三年、如今筋骨條條露、鼻孔頑然不受穿村草歩舊田園、桃花如錦柳如煙、放教臥月眠雲去、飢有青芻渴有泉、拍禪牀下座退院後、天童寺境内の東堂に隠棲していたのであろうか、『語錄』序を撰述した「前住紹興崇福禪寺鄱陽釀至仁」の行中至仁（一二三〇九一八）は、平石の遷化を至正十七年（一二五七）「示涅槃於東堂」と述べている。この三会『語錄』は、「序文」より門徒の都寺職大用などが収集し、平石の遷化した九年後の至正二十六年（一二三六六）に刻梓したことが知られる。なお「題跋」は、平石の在世中、至元

二年（一二三三六）春、「住阿育王山松月比丘正印」の松月翁・月江正印（生没年不詳）によつて撰述されている。平石が天童寺に在住していたころから『語錄』の編集が開始されていたのであろう。

平石の法嗣には、「保聖寺語錄」の編集者である文栖（台州真如寺）が知られる。門人や徒弟には、「定水寺語錄」を編集した子昶・了因、『語錄』末尾の「真讚」を編集した師楷・「福唐」文鉢・汝均、『語錄』全体の収集に尽力した大用、定水寺時代の雪窓書記、天童寺時代の恕中無愠（一二三〇九一八六）蔵主・木菴司聰（一二三一二一八一）、実菴「松隱」小茂・純監寺・兼侍者、三ヶ寺いづれか判明しないが岑侍者・炬藏主・礼維那・助侍者・空維那・數首座、中竺園藏主・雪峰鏡侍者・何山句侍者・育王邂維那・雪竇亨藏主・均侍者・壽侍者・言侍者・宝藏主・寧侍者・志維那・京維那・惠侍者・龜山運上人・江西源上人・瑩上人・徑山の行中至仁（一二三〇九一八二）など多數いる。注目されるのは、日本人の巨藏主と「廬山」東林忍侍者が含まれていることである。

道友には、法兄弟の無言「江心」宣（生没年不詳）をは

じめ、前掲の月江正印の他、我菴本無（一二八六）一三四三）、元叟行端（一二五五）一三四一）、龍翔雲芳（生没年不詳）、太平古鏡（生没年不詳）、護聖青山（生没年不詳）、北隱（生没年不詳）、靈石「古帆」新（生没年不詳）などが見える。

○平石史料

- (1) 『平石和尚語録』（平石如砥禪師語録）「続蔵一二二一」八七（一九九）（『禪宗集成』17所収）、行中至仁の「序」文より至正二十六年（一三六六）の刻梓であること、月江正印の「題跋」は平石の生存中の至元二年（一三三六）春に撰述されたもの。
- (2) 『糸氏稽古略統集』卷二「正蔵四九一九三九b」、末尾の「集列六十一人附見十五人」中に「太白法師砥」の名が見えるものの、他の史実的記事はない。
- (3) 『続灯存稿』卷七「続蔵一四五一八二a-b」「明州天童平石如砥禪師」、前掲(1)の『語録』の「偈頌」中、「送懺藏主帰省徑山元叟和尚」を所収する。
- (4) 『増集続伝灯録』卷六「続蔵一四二一四五二」「四明天童平石如砥禪師」、冒頭「師出世保福升定水至天童」の「保福」は保聖寺の誤り。『語録』中の三会より「上堂語」の5を抜粋し引用。
- (5) 『続指月録』卷七「続蔵一四三一四四八b」「明州天童平石如砥禪師」、前掲(3)『続灯存稿』に同じ。
- (6) 『続灯正統』卷二五「続蔵一四四一三九三d」「寧波府天童平石如砥禪師」同右
- (7) 『五灯全書』卷五一「続蔵一四一一六七a」「明州天童平石如砥禪師」同右。
- (8) 『寺志』卷三「二三五」六「先覺攷」には平石の略伝。文中に木菴司聰・恕中無懼・実菴小茂の三人の参考者を挙げてある。卷五「三五一」二「雲蹤攷」に無作文述の略伝・同右「三五二」四に実菴の略伝・同右「三六一」三に恕中の略伝が所載している。
- (9) 『続志』卷下「法要」「五a-b」に『語録』（天童寺語録）の上堂語2と「四威儀」を所収、卷下「塔像」「四b」五aに了堂惟一の「題平石禪師讚」、同「表贍」「七a」に月江の「平石禪師語録後序」を所収する。